

知的障害のある自閉症生徒同士の集団活動場面における 仲間間相互交渉の促進に効果的な随伴手続きの検討

○町田 裕紀

村野 史

加藤 慎吾

（茨城県立つくば特別支援学校）

（東京都立武蔵台学園）

（東京学芸大学）

KEY WORDS：集団随伴性 自閉症 相互交渉

【目的】本研究では、学齢期の中度・重度知的障害のある自閉症生徒の集団活動に、集団随伴性を適用することで、仲間への自発的な関わりが促進されるのかを検討した。特に、課題が個別に呈示され、集団全体に強化が与えられる性質をもつ依存型集団随伴性の効果を検討するため、「非依存型」・「相互依存型」・「依存型」の 3 種類の強化随伴手続きが及ぼす、生徒同士の関わりと課題遂行行動への影響を比較した。

【方法】

1.対象児

	学年・年齢	診断名	検査結果
A 児	特別支援学校高等部 3 年生	自閉症	WISC-IV CA17 : 9 FSIQ47
B 児	特別支援学校高等部 2 年生	自閉症	WISC-IV CA16 : 5 FSIQ52
C 児	特別支援学校高等部 2 年生	自閉症	田中ビネー CA16 : 11 IQ35

2.標的行動：プロンプト、応援・励まし、賞賛、フィードバック、要求、感謝といった他児への自発的な関わりを標的行動とした。3.指導手続き： 集団指導において、3 つの活動を行った。各活動には、「非依存型」・「依存型」・「相互依存型」の異なる 3 つの随伴手続きを適用した。「非依存型」では、課題の呈示と強化を個人に行った。「依存型」では、課題の呈示は個人に行い、強化は集団全体に行った。「相互依存型」では、課題の呈示と強化を集団全体に行った。フェイズの移行は 1 度に複数の随伴手続きが変わらないようずらして行った。

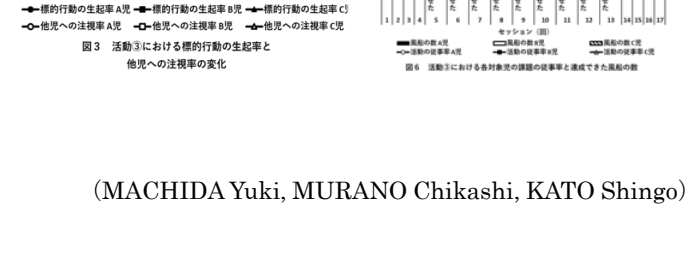
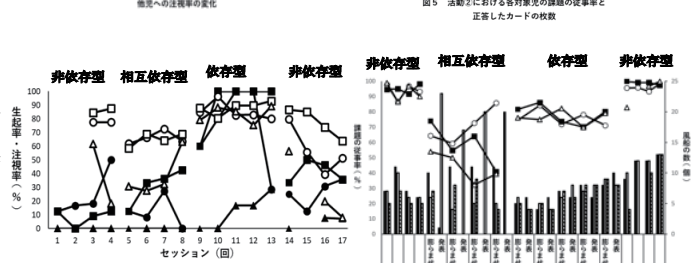
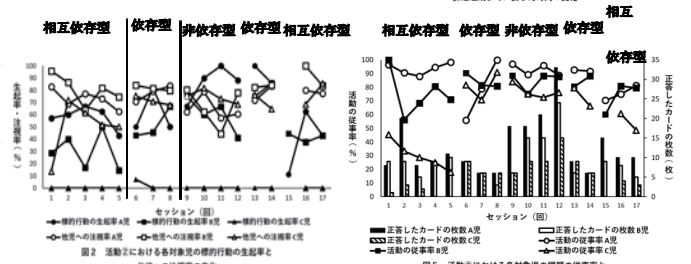
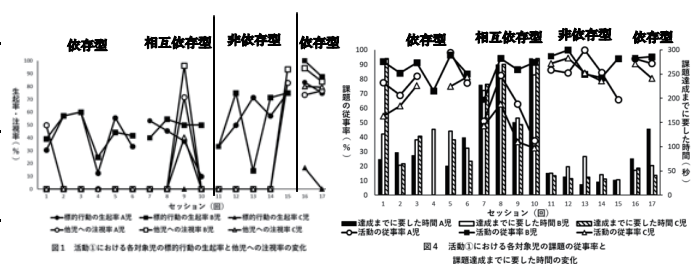
【結果と考察】各活動の標的行動の生起率と他児への注視率の変化を図 1～図 3 に、各活動の従事率と成績の変化を図 4～図 6 に示した。

活動①の 2 回目の依存型フェイズや、活動③の依存型フェイズの結果から、依存型集団随伴性は、知的障害の程度に関わらず、相互交渉の促進に効果がみられることが示唆された。その要因が注視率から伺える。注視率が高いフェイズにおいて、標的行動の生起率も高い傾向がみられることから、他児の課題遂行が相互交渉の先行事象として機能したことが考えられる。一方、課題の従事行動に関しては、いずれの活動においても非依存型集団随伴性が最も好ましい影響を及ぼし、

次いで依存型集団随伴性が効果的であった。課題の従事に関しては、課題の個別呈示が功を奏した可能性が示唆され、特に、自分の課題だけに集中できる非依存型集団随伴性が、課題の従事のみならず、成績にも良い影響を及ぼした。

これらの結果から、中度・重度知的障害児にとっては、課題が個別に提示されることが、相互交渉、課題従事ともに前向きな結果をもたらす可能性が示唆された。

これまで攻撃行動が起こることを避けて、依存型集団随伴性の検討がされていなかった。しかし、攻撃行動を最小限に抑える工夫をしながら、依存型集団随伴性の効果的な適用方法について検討することが必要となるであろう。



(MACHIDA Yuki, MURANO Chikashi, KATO Shingo)